
センター発足に際して

航空自衛隊幹部学校長
空将 尾上 定正

国家の安全保障の領域は、軍事はもとより、資源問題や経済問題を含めた多岐にわたるものとなりつつある。国際テロリズムやサイバー攻撃、海洋における常続的な緊張状態など、平時と戦時の境界が曖昧になりつつある。ベルリンの壁が崩壊してから25年、9.11同時多発テロから13年、3.11東日本大震災から既に3年。世界であるいは国内で、国家の存立と繁栄に関わる重大な事象が多発し、その都度、安全保障に関わる思考の枠組み（パラダイム）は変化してきた。しかもそのような重大事象が生起する頻度とパラダイム変化の速度は増す傾向にあるようだ。次に生起するのはどのような事態なのか、どうすればその事態を回避・抑止・予防できるのか、対処の目標はどう設定すべきか、どのような手段をどの時点で使用すべきか。国家の総力を考慮ゆえんに入れた政府全体のアプローチが求められる所以である。昨年発足したNSC（国家安全保障会議）や初めて策定されたNSS（国家安全保障戦略）は、このような安全保障環境の要求への必然的な対応であろう。

徳川大尉／日野大尉が東京代々木練兵場で日本初の動力飛行に成功（1910年）してから100年、東京オリンピックで国立競技場の上空に五輪の輪を描いたブルーインパルスが発足（1960年）してから50年余。技術進歩に支持されたエア・パワーの進化と役割の拡大には目を見張るものがある。エア・パワーとは、空軍戦力のみならず、陸・海軍保有の航

空戦力、さらには民間航空から航空産業を含む航空に関する国力を意味するが、それは更に、宇宙／サイバーという新たなドメインに拡大し、プラットフォームは航空機からミサイル、有人機から無人機（UAV）へと多様化、及ぼす効果も火薬／衝突等の物理的・運動的作用から ECM／レーザー等の電磁的・非運動的（non-kinetic）作用へと進化しつつある。湾岸戦争（1991年）では、精密誘導兵器を取り入れた航空戦力中心の運用によって戦いの様相が一変した。これは最先端技術の活用と共に、それまで戦略爆撃と戦術攻撃に二分していた航空ドクトリンが、ウォーデン大佐の「五輪モデル」によって、戦略攻撃という新たな理論的根拠を得たことが大きい。一方、いわゆるテロとの戦い（Counter Insurgency：COIN）におけるエア・パワーの効用は限定的であり、この分野におけるエア・パワー運用に関するドクトリン（戦略理論）は未確定である。総合的な国家安全保障の手段として軍事力、^{なかんずく}就中エア・パワーがどのような役割を担えるのか、政治によって設定された目標を達成するためにいかなる効果・効用を発揮し得るのかなど、エア・パワーのプロには複雑な戦略的見積りと判断が求められている。

航空自衛隊（以下「空自」という。）は発足以来60年間、安全保障環境の変化に適応し、エア・パワーの運用を専属的に担い、国防という使命を果たしてきた。航空自衛隊幹部学校（以下「空幹校」という。）も同じ期間、エア・パワーの中核となる幹部教育と理論研究によって、その土台を支えてきた。今、節目の時に当たり、急激に変貌する安全保障パラダイムと多様化するエア・パワーを踏まえると、次の60年に向けた新たな進化（evolution）が必要である。航空総隊航空戦術教導団と空幹校航空研究センターの新編等は、その象徴である。空幹校では、航空研究センター（以下「センター」という。）が発足当初から期待される役割を果たすため、母体となる研究部のみならず学校全体の意識改革に取り組んできた。鍵は、独自性（niche）、共同・ネットワーク、成果主義の3つである。

空幹校の強みは何か、期待される役割は何かを考えると、国内で唯一

の我が国の空の主権と治安を守るための教育研究組織ということである。国内に安全保障を研究する機関は、防衛研究所はじめ多くのシンクタンク等が存在する。が、エア・パワーに特化した研究機関は見当たらない。空幹校は、実任務を遂行する部隊と理論・ドクトリンをつなぐ唯一最適の研究機関であり、あらねばならない。センターでは、全ての研究をエア・パワーという視点から捉え、独自の付加価値を追求する。新設するセンターは、従前の研究部（定員31）を母体にセンター長（1佐（一））以下、47名（定員）の陣容となる。空自全体の定員が現状に制限される中、大幅な増員であるものの、これだけの要員で実施できることには限界がある。したがって、センターで実施する研究や成果の管理等については厳選し、効果的かつ効率的な運営を期す。一方で、内外との連携を可能な限り広げ、エア・パワー研究に関するネットワークのハブとなることを目指したい。部内的には、空自全体の知識経験を活用するため、航空幕僚監部、統合幕僚監部や主要部隊等と連携した事態対応に関わる研究、教訓収集、ドクトリンへの反映である。対外的には、諸外国の空軍研究センター等同様の趣旨で活動する組織と交流し、共同研究等を実施していく。安全保障教育を重視する一般大学や防衛研究所等の研究機関とも連携し、定期的なセミナーの開催も企画したい。最後に、センターで実施する研究等の成果は、空自の精強化という目的に資するよう、広く活用してもらわねばならない。このため、秘密保全と情報公開の基準を厳格に設定し、保全を担保しつつ、可能な限り成果を公開、発信する。

「天才とは、その人だけに見える新事実を見ることのできる人ではない。誰もが見ていながらも重要性に気づかなかった旧事実^{けん}に気づく人のことである。（塩野七生『ローマ人の物語Ⅱ』）」

空幹校研究部は、エア・パワーに関し、事実を整理・分析・評価し、その重要性・有用性を見だし、周知する活動を牽引^{けん}するセンターへ再生する。

皆様のご指導とご支援・ご協力を心からお願いします。